

僑郷としての福清社会とそのネットワーク に関する一考察

小 木 裕 文

前言

世界各地に移住した華僑華人のなかで、福建省出身者は推計では全体の31%を占めている。その数は約1033.5万人、世界160余りの国と地域に及んでいる。その多くは東南アジア、なかでもシンガポール、インドネシア、フィリピン、マレーシアなどに数多く移住している¹⁾。本研究は福建出身の海外に居住する華僑華人のなかでも少数派に属する福建省北部の閩北方言帯である福清・福州グループを焦点に絞り、送出地域と受け入れ地域、pushとpullの歴史的な関係や僑郷の社会変容を多面的な角度から考察しようとしたものである。従来の華僑華人研究では、閩南地方の多数派の福建籍の華僑華人を対象になることが多い。それは福建幫という呼称がそのまま閩南出身者を指すことから理解できる。

本研究を行なうにあたり、福建省廈門大学南洋研究所を訪問し、南洋研究所の研究者との研究交流を行い、南洋研究所が出版している華僑華人研究の資料や福清、福州地方志を大量に収集することができた。また、シンガポールの宗郷会館聯合總會や華人社会研究者を訪問し、会館ネットワークに関する資料を入手することができた。これらの資料の分析や聞き取り調査のなかで、地縁・血縁を基軸とするシンガポールと福建省との歴史的な結びつきによって、閩南だけではなく、閩北を含めた福建人の重層的なネットワークが結ばれていることが確認できた。福建は古くから閩と呼ばれ、閩南部の廈門だけではなく、閩北部の福州、福清地方との関係もあり、送出地域である福清・福州とシンガポールの福清会館、福州会館との強い結びつき、さらにはインドネシア、マレーシア、日本、アメリカの福清・福州グループとの地縁・血縁・業縁ネットワークも複合的に存在している。

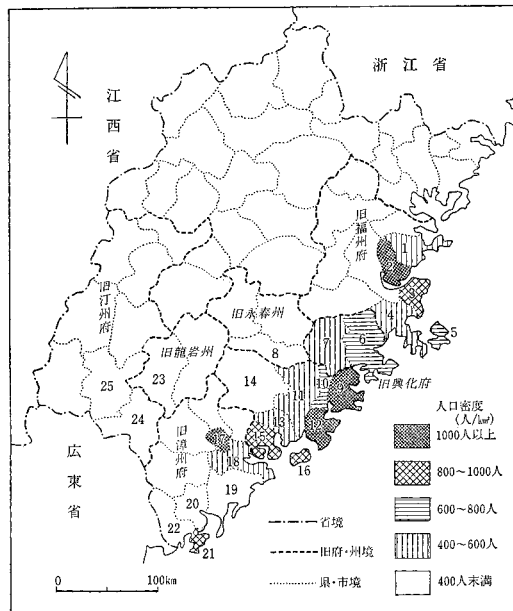


図1 福建省における主要な僑郷および人口密度(1982年)

1. 連江 2. 福州 3. 長楽 4. 福清 5. 平潭 6. 莆田 7. 仙游 8. 永春 9. 惠安
 10. 泉州 11. 南安 12. 晋江 13. 同安 14. 安溪 15. 廈門 16. 金門 17. 漳州 18. 龍海
 19. 漳浦 20. 雲霄 21. 東山 22. 詔安 23. 龍岩 24. 永定 25. 上杭

図中の境界は、1982年現在のものを示す。

人口密度は『中華人民共和国人口密度図』中国統計出版社 1986年による。山下論文 p26

1. 閩北幫(福清・福州)華人社会について

福建省は田畑が少なく山間部の多い地域であり、昔から「八山一水一分田」といわれ、山が多く、耕地面積が少ない地域であった。この貧困地域から清末に苦力と呼ばれる単純労働者が大量に海外に押し出されていったのである²⁾。

現在、世界の華人人口は約3500万人と推計される。そのうち、約90%が東南アジアに集中している。東南アジアの五大幫と呼ばれる方言別集団には福建、広東、潮州、客家、海南がある。なかでも、福建省は広東省に次ぐ第二番目の僑郷(華僑の故郷)である。福建籍で海外に定住する華人は800万人余に達し、そのうちの約85%が東南アジアに集中している。福建籍の華人は次のように大別することができる。

(1)閩南人(2)福州人(3)福清人(4)興化人(5)客家人。東南アジアでは福建のなかの最大勢力である閩南人を福建人と呼んで、他の福建籍の小集団と区別している。また、客家は省を越えて別の幫を形成している。興化人は閩南、閩北に挟まれた莆田、仙游両県出身者を指し、福州人、福建人と区別している。彼らの使う興化語も福建語や福州語と些か異なる。福建省は先述した

ように山地が極めて多くて村や町を遮断し、交通の不便さによって人的交流も疎遠であったため、福建方言が多岐にわたっている³⁾。

さて、ここで福清を中心に、福州を加えた閩北幫の華僑華人の分布状況をみていきたい。先述したように、閩北幫は東南アジア各国の華人社会にみられる少数集団であるが、各国別にその特徴を紹介していきたい。なお、世界に点在する福清華僑華人は51万人といわれる。清末・民国時代から1980年頃まではインドネシア、マレーシア、シンガポール、日本にその多くが集中していた。改革開放以後、出国先は73の国と地域に拡大し、人数も51万人を超えるに至った。但し、この数字には非合法の滞在者数と香港、マカオ、台湾の福清人は含まれていない。そして、新移民が目指す国や地域は過去の流れとは異なり、経済発展国に集中する傾向が生まれている⁴⁾。

まず、マレーシアでは、福清人は約9千人ほどで、全国に点在し、華人社会ではそれほど目立たない存在である。ここでは、同じ閩北幫の福州人社会について紹介する⁵⁾。福州人もマレーシア全体では少数派であるが、東マレーシアのサラワク州シブの華人社会では多数派である。シブの華人人口の約68%を占めている。清末、福州人の黄乃裳（Wong Nai Siong）は政治的混乱によって経済苦に喘いでいる同郷人を救うため、1889年シンガポールを訪れ、福州人の移住先を探し求めた。黄乃裳はサラワクの支配者チャールズ・ブルックがラジャン地域のシブ一帯の開墾を計画していることを聞き、サラワクに渡り、直接ブルックと交渉して契約を結び、シブへの開墾移住を取り決めた。翌年、黄乃裳は故郷に帰り、農業移民者を募り、応じた者をシブに送り出した。黄乃裳はキリスト教徒であり、初期の移住者もすべてキリスト教徒であったといわれる。この年には計千百人余がシブに定住し、原始林の開墾事業に乗り出した。この後、福州人の移民が続き、シブは「新福州」と呼ばれるに至った。福州人は農業、林業に従事し、都市では銀行、雑貨店、コーヒー店、金属輸入業などを経営していた。彼らの同郷会館は福州公会である。なお、旧福州府に属する閩侯、閩清、古田、福清、長樂、連江、永泰、屏南、羅源、平潭の10県を「福州十邑」と呼び、福州人と総称している。但し、時には福清人と区別することもある⁶⁾。

2．シンガポールの福清人社会について

シンガポールでは福建人が多数派で、福州人、福清人、興化人は方言五大幫にも属せない、少数派である。華人人口比率は福州人1.7%、福清人0.6%、興化人0.9%である。少数派ではあるが、彼らはそれぞれ独自の福州会館、福清会館、興化会館を持ち、会館活動を行なっている。ここでは、福清会館について紹介する⁷⁾。

シンガポールへの福清人の移民時期は、他の方言五大幫に比べて遅く、会館が設立されたの

も、1910年とされている。自分たちの華僑学校である培青学校が創立されたのは1920年である。彼らが居住した地域は、シンガポール河の北岸地域で、客家人、海南人、福州人の居住区と隣接するビクトリア街やクィーン街であった。当時、遅れて来た彼らの職業は限られていて、福州人と同様コーヒー店経営や理髪業が主であった。

福清会館は少数派ながら、会館活動を活発に行なっている同郷会館のひとつである。会館への華人青少年の関心が年々低下していくなかで、福清会館は改革に取り組み、年令、性別、時には帮派を越えた活動内容を展開していった。故郷の福清劇団の招聘、福清書道家、画家の展覧会、福清の食文化フェスティバル、故郷福清への訪問団の組織化、伝統行事の開催、カラオケ大会、スポーツ大会、世界福清美人コンテストなどに工夫をこらしていた。また、会館の雑誌「融情」(現在は「新融情」と改名、「融」は福清の簡称)を定期的に出版し、故郷福清や世界の福清人の動きなどを紹介し、シンガポールの福清会館とのネットワーク形成に大きな役割を果たしていた。会館の様々な活動には、培青学校の卒業生がほとんど加わり、会館と附属学校との緊密さを示している。活動資金は、会員の寄付や会館が行なう不動産業での収入などで賄われている。会員の寄付のなかで、最も大きなものが、海を隔てた隣国インドネシアの大実業家スドノ・サリム(林紹良)、陳子興、林文鏡、姚春桂などの大口寄付である。福清華人の国境を越えた、連帯が見て取れる⁸⁾。但し、98年のインドネシアの政変による経済的混乱のなかで、サリムの資金援助が突然途絶えたといわれる。

3. インドネシアの福清人社会について

インドネシアの華人社会では福建、客家、広東、潮州の順で多数を占め、その次に福清人、興化人などの少数派が存在する。世界の福清出身者は51万人といわれるが、そのうちの20万人がインドネシア華人である。インドネシアの華人企業家を代表する人物が福清出身者であることが特徴的である。それは前述したスドノ・サリムである⁹⁾。サリムはスハルト元大統領の盟友で、インドネシアの経済発展をリードしてきたサリム・グループの創始者である。サリムは22歳の時、貧困を逃れ親戚を頼りに中部ジャワに渡ってきた。布や雑貨を扱う行商から身を起し、大企業家になった立志伝中の人物である。福清人の多くはジャワに分布し、バンドンに集中している。福清会館は1965年の9・30事件以後、他の同郷会館と同じように閉鎖され、現在に至っている。サリムは1990年の中国との国交回復後、中国への投資を積極的に推し進めた。故郷である福清市に工業団地を建設し、北京、天津での即席麺の生産、上海でのパームオイルの精製などを手掛けた。この祖国への投資はインドネシア人の反感をいっぽうでは引き起こしていた。ただ、アメリカで教育を受けた後継者と目されているアンソニー・サリムは中国への親近感からの投資ではなく、あくまでもビジネスであることを強調していた。ここに、父

親との中国への意識の違いが見受けられる。会館活動が国内で閉鎖されている間は、インドネシアの福清人はシンガポールの福清会館との親密な関係を維持していたようである。

1998年の政変後に発生した華人に対する暴動や襲撃によって、華人企業家を含めた華人の国外避難が相続き、スハルト元大統領と関係の深かったサリムも海外に避難し、未だアメリカに滞在したままである。ワヒド政権による華人政策の変化によって、華語教育、会館活動、政治活動に対する規制が穏やかになっているので、福清会館の公式的な復活も間近になっている¹⁰⁾。

4．日本の華僑社会と福清人、福州人について

日本と福州、福清との関係を語るときは、江戸時代まで歴史を遡らなければならない。長崎の出島に設けられた唐人館には南京、浙江、泉州、福州、厦門などから、貿易商人などが来日していた。これ以外に、明朝の遺民、儒者、医者、僧侶、書家、画家、工芸職人などが長崎に渡ってきている。長崎にはすでに華僑社会の原型が作られていたといつてよい。推計では、元禄時代（1688-1703）には一万人の中国人が暮らしていたという。福州人の貿易商人で、篤志家として知られた魏之琰、同じく福清出身者では何高材が挙げられる。彼らはいずれも定住し、お寺、神社、橋などの建築に多額の寄付をしたという記録が残っている。仏教交流という面では、長崎には興福寺、福濟寺、崇福寺の唐寺があった。それぞれの歴代の住職の原籍を見ると、興福寺が浙江杭州府、福濟寺が福建泉州府、崇福寺が福建福州、興化、福清、長楽とされている¹¹⁾。なかでも特記されるのは、福建省福清にある黄檗山萬福寺法席の隠元が来日し、幕府の援助を受けて宇治に臨濟宗萬福寺を建立したことである。この黄檗宗が当時の禅宗に与えた影響は大きく、西日本の大名を中心とする武家階層のなかに帰依するものが多かった。隠元に伴ってやってきた高僧、文人、技術者が仏閣建築、仏像彫刻、書画、精進料理、医薬、造園、開墾、印刷などにも幅広い影響を与えた。江戸初期から中頃まで萬福寺の歴代住持は、ほとんどが福建から渡来した。そのため、伝統的な儀式作法、法式は中国大陆、台湾、東南アジアの中国系寺院で行なわれている仏教儀礼と共通している。現在は、在日華僑が信仰するお寺としても知られている。毎年10月中旬、普度勝会が行なわれ、全国から多数の華僑・華人が集まる。

明治時期には福州人、福清人が船員として来日し、彼らが副業として布地の行商を行なったことが注目される¹²⁾。すでに、江戸期中期に福州の船員たちが当時絹織物の産地であった福州から私的にそれらの産物を長崎に持ち込んで、商いをしたとの指摘がなされている。明治・大正・昭和期の日本華僑の仕事は、貿易商や三把刀（料理、洋服仕立、理髪）が主なものであった。遅れて来日した福清人は長崎で先ず呉服行商（布地の移動小売販売）を行ない、その後、第二次世界大戦終了ごろまで、日本各地の町村で呉服行商を行っていた。最初は中国製の絹、

緞子などを扱い、後に日本製の布地を扱うようになったという¹³⁾。前章で指摘したように、インドネシアの福清華僑もジャワで布地の販売や生産で、富を築き現地へ定住していった例を見るまでもなく、この業種は海外で商いをする福清、福州出身者に受け継がれていったようである。都会を中心にする先來華僑とは違い、福清華僑は辺鄙な農村を苦勞しながら行商し、日本社会のなかに入り込んでいった。しかしながら、この生地に行商は不安定な職業であったため、少しの貯えができると、より安定した職業へと転業していった¹⁴⁾。

いわゆる日本の老華僑の統計数を見るために、最新統計ではなく、昭和62年度の「在留外国人統計」に従うと、在日華僑の半数近くが台湾籍で、次に福建籍がくる。福建籍の同郷組織として、福建同郷会があるが、会員の80%が福清出身者である。とりわけ、福清の高山鎮出身者が多いのが特徴である。この高山鎮はとりわけ瘦せた土地が多い山地である。また、血縁・地縁ネットワークを利用した来日であることが理解できる。貧困と飢餓というpush要因、地縁・血縁を利用した出稼ぎ先というpull要因が福清華僑を来日へと駆り立てたのである¹⁵⁾。福清華僑その多くは函館、神戸、横浜、東京、京都、大阪に居住しているが、長崎を中心とする九州、中国地方などの西日本にもかなり存在していることがわかる。九州、中国地方の華僑のほとんどが福清華僑であるという事実は、江戸期における福清と長崎との歴史的な関係と明治後期以降の呉服行商の発展によるものだという研究成果が明らかになっている。戦後、福清華僑は呉服行商という職種から抜け出て、多様な職種に進出し、経済的に成功していった例が多い。社会主義政権成立後、福清からの来日は特別な理由以外には断たれることになった。

5. 再び海外を目指す福清人について

改革開放政策による海外渡航の緩和（留学、研修、華僑親族への訪問）や経済活動のグローバル化によって、中国人の海外流出が目立つようになっている。この現象は90年代に一層顕著になり、現在まで衰えることなく続いている¹⁶⁾。

現在、福清、福州からの海外への移動はアメリカ、とりわけニューヨークのチャイナタウンを目指す動きが顕著であり、その数は激増している。アメリカでは規制を強化しようとしている。昨年、イギリスの港町ドーバーで、トラックのコンテナから、中国人密航者58名の死体が発見され、EUや世界を震撼させた事件が起きた。この密航中国人の出身地がすべて福州、福清、長楽であることが明らかになっている。すでに、中国 ロシア 旧東欧 EU圏に入るルートが中国の犯罪組織「蛇頭」、ロシア、イタリアのマフィアとの連携によって確立されているといわれ、国際協力のもとでの対策に迫られている¹⁷⁾。

日本においても在日中国人がこの十数年間で増加状態にある。とりわけ福州、福清出身者のなかには一部非合法入国者も含まれ、その数や生活実態は法務省でも完全には捉えきれないの

が現状である。最初は江戸期からの航路を利用して、密航船で長崎を目指すものが多かったが、取締が厳しくなると、鹿児島、大分、和歌山、福井、山口、島根、茨城などを目指すようになった。取締がさらに厳しくなると現在はもう少し巧妙になり、コンテナの利用、偽装結婚、偽装入学、偽残留孤児、偽造パスポート、また合法的入国をした後、不法滞在をするケースも目立ってきている¹⁸⁾。現在のpush要因は、貧困と飢餓の時代とは異なり、福州、福清とも改革開放政策の進展、世界の華僑華人の投資や外国資本の進出により、経済発展が著しいが、なお地域や個人の経済格差があり、その格差を解消するために出稼ぎによることがブームになっている。彼らの送金や出稼ぎによってもたらされた資金によって、福清では住宅の新築ラッシュが続いている。若者たちを合法、非合法を問わず、海外へ駆り立てるものに、フロンティアの開拓精神、より多くの経済的豊かさや自由さを探求心なども、要因としてあげられるのではないだろうか。ただ、新築した家を後にして、再び一攫千金を夢見て海外を目指すものが増えている。福清人の改革開放政策以来の海外移民について、廈門大学南洋研究院の施雪琴氏は最近発表した研究論文のなかでも、筆者の指摘と同じような原因をあげていた¹⁹⁾。ここでは、要点のみあげておく。

(1) 改革開放政策以後、人民の生活水準は上がったが、先進国との経済格差が大きいためさらなる生活水準の向上を求めて、移民を目指している。

(2) 海外移民の歴史的な伝統が福清人の移民ブームに大きな役割を果たしている。数百年の歴史をかけ、海外へ散らばっている福清人の「移民鏈」(移民の環)が、改革開放以後再び機能を発揮するようになってきた。

この他、施氏は福清人の集団的な性格をあげている。福清地区は芋類しかとれない痩せた土地が多く、歴史的に海を頼って生存してきたので、海外で困難に耐え、積極的に出ていく冒険心、開拓精神を持っている。このことが国際的な蛇頭集団のターゲットになっていると指摘している。

現在、日本をめざす福清（長楽、平潭を含む）からの移動は合法的に福清の地縁・血縁・業縁・学縁などのネットワークを利用したものと「偷渡」と呼ばれる蛇頭を介した集団密入国の形をとる非法定住とに分かれている。これはアメリカ、ヨーロッパを目指す場合も同じであると判断してよい。海外に合法的なpullの地縁・血縁ネットワークを持たない福清、長楽、平潭の中国人が蛇頭を利用して、偷渡（密航）をはかっている。日本国内での生活実態、蛇頭集団との関わりについては、今後の検討課題としておく。施雪琴氏の推計では、福清から日本への「新移民」は約2万5千人、その半数以上が非合法滞在としている²⁰⁾。

一方、インドネシアの政治体制危機によって、暴動の対象となった福建出身の富裕華僑華人層が福建省、シンガポール、アメリカ、オーストラリアへ避難という形で移動している。例えばスハルト体制を支えた政商ストノ・サリム（林紹良）や他の華人企業家とその一族などの富

裕層はアメリカ、オーストラリア、シンガポールへ、華人中間層の子弟は留学の名目で福建省の各大学へ避難している。福清、福州、福建ネットワークが、再流出という時にも機能的に作用することがわかる。なお、1988年世界福清同郷聯誼会がシンガポールで設立され、スドノ・サリムが会長に就任している。シンガポールが活動の中心拠点になっている。

6. 僑郷福清社会の変容について～結語に変えて～

貧困地域の代表であった福清は行政単位が1990年に県から市へ昇格し、インフラの整備も充実した、人口118万人の近代都市へ生まれ変わろうとしている。経済面での発展が顕著になった理由は、僑郷を利用し、華僑華人資本を誘致する経済政策が功を奏したからである。この成功によって、台湾企業や外国企業の福清への進出を呼び込むことになった。福清市政府はこれを三資企業誘致政策と呼んで、法整備や投資の環境作りを行なっていた。華僑華人資本のなかで、この地に最初に投資したのは、やはり福清出身の華僑華人である²¹⁾。故郷の落伍した状況を助けるために、多くの福清出身の華僑華人が「融情」によって、投資や寄付を行なったのである。そのなかで、最大のものはインドネシアのサリム集団が中心となって多国籍企業と共同で開発を手掛けた「融僑経済技術開発区」である。この開発区は福清市の中央部に位置し、福清の経済発展の中心を担っている。この開発区の成功が呼び水になって、華僑華人の協力のもとで「元洪投資区」が福清港一帯に開発され、発展段階にある。この投資区内にはサリムの出身地海口鎮牛宅村があり、サリムの寄付は水道、道路、橋、学校、テレビ受信設備、幼稚園、養老院、ホール、奨学金など多岐にわたり、この結果、村は大変貌を遂げている。また、村の周辺に工場を誘致し、村の経済を活性化させている²²⁾。

サリム以外の福清華僑華人も同様である。例えば高山鎮では、東南アジアの富豪華商が、故郷の西江村に企業を設立し、就業問題を解決しようとした。当時、西江村は水源や電力が不足していたので、この華商は高圧電力回路を建設し、また深い井戸を掘りあてることで、これらの問題を解決した。そして、融林塑膠五金有限公司、融光不銹鋼製品有限公司、融宏廚具有限公司などの単独企業、合併企業を設立した。こうして、西江村は省の工業村に指定され、現在に至っている²³⁾。

黄檗宗で有名な黄檗山麓にある梧瑞、朱里、黎陽、西山の四つの村は、歴史的に海外に移民の多い僑郷として知られる。そのなかで、梧瑞は100%が僑属という典型的な僑郷である。この村の移民先はインドネシアのバンドンに集中しており、バンドンでは紡績業を営んでいる。バンドンは別名「小梧瑞」と呼ばれている。彼らの寄付には学校、道路、保健所、老人娯楽所などがあり、またダム建設への投資を行い、村の家庭の電気設備の取り付けまで無料で行なっている²⁴⁾。この他、日本の神戸華僑総会会長林春同は福清市東澗鎮出身であり、アパレル商社

を経営し大きな成功を収めた華僑実業家である。彼もまた故郷東澗鎮の小学校，中学校の建設に多額の寄付を行い，故郷の教育事業の発展に力を注いでいる²⁵⁾。

このような例に典型的に見られるように，福清出身の華僑華人と福清とのネットワークは，僑郷の経済開発のための投資と出身僑郷に対する「僑情」からの寄付とで繋がっている。海外の福清出身の華僑華人が僑郷の発展に果たした役割は大きいといえる。現在の僑郷の発展も，在外華僑華人の存在抜きで語ることはできない²⁶⁾。また，僑郷のさらなる経済発展は，国際的な「蛇頭」集団の活動を抑える力にもなりうることを指摘したい。

付記 本研究は1999年度立命館大学学術研究助成「特定研究」による成果の一部である。資料の収集にあたっては，廈門大学南洋研究所の李国梁教授，庄国土教授，及び本学大学院生駒見一善氏のお世話になった。また，シンガポールの福清会館に関する資料は，シンガポール在住の華人社会研究者の合田美穂氏から，多大な援助を受けた。ここに，記して感謝いたします。

注

- 1) 『改革開放与福建華僑華人』東南亜与華人華僑研究叢書 厦門大学出版社 1999 p2
- 2) 山下清海「福建省における華僑送出地域（僑郷）の地理学的考察」『華南 華僑・華人の故郷』慶応大学地域研究センター 1992 pp24-35
- 3) 前掲2) 及び『新加坡福清会館三慶紀念特刊』新加坡福清会館 1988
- 4) 施雪琴「改革開放以来福清僑郷の新移民 兼談非法移民問題」pp.26-27 『華僑華人歴史研究』2000，第4期
- 5) 劉子政『黄乃裳與新福州』南洋学会出版 1979，田英成「砂勞越福州人的移植，經濟活動与社会組織的論析」1996
- 6) 前掲2) 山下論文 p27
- 7) 前掲3) 『紀念特刊』p13及び『新融情』1998，1999 福清は古来より「玉融」と呼ばれ，「融」と簡称されている。
- 8) 前掲7) 『新融情』1998.7，合田美穂「新加坡年轻人対会館的看法」聯合早報 1998.4.6
- 9) 金沢浩明「スドノ・サリム」『季刊アジアフォーラム』1995. 陳文壽主編『華僑華人的經濟透視』香港社会科学出版社 1999.11
- 10) 産経新聞「ジャカルタ暴動から一年」1999.5.13，楊啓光「後蘇哈托時代印尼華人窺探」『華僑華人歴史研究』2000 第2期
- 11) 羅晃潮『日本華僑史』広東高等教育出版社 1994，辻善之助『日支文化の交流』創元社 昭和13年刊，内田直作『日本の華僑社会研究』同文館昭和24年 参照
- 12) 「福清華僑の日本での呉服行商について」茅原圭子・森栗茂一 pp17-44 大阪教育大学地理学報 27号 1989 参照
- 13) 前掲12) p25，「日本における福州幫の消長」許叔真 撰南学術7 1989 参照
- 14) 「福建在日華僑・華人の日中文化交流への貢献に関する総合的研究」pp63-64 『長崎華僑と日中文

化交流』長崎華僑研究会年報第5輯 1989.5

- 15) 前掲14)の僑郷調査では出国要因について、経済的要因、社会的要因、政治的要因を順にあげている。pp54-56
- 16) 趙紅英「近二十年来中国大陆新移民若干問題的思考」『華僑華人歴史研究』2000 第3期
- 17) 『平成十一年度警察白書 国境を越える犯罪との闘い』警察庁 1999.9
- 18) 森田靖郎『新宿幫東京チャイニーズ』講談社文庫 1999, 『密航列島』朝日新聞社 1997
- 19) 前掲4) 施雪琴論文 p29
- 20) 前掲4) 施雪琴論文 p28
- 21) 前掲1) 童家洲「浅論文化背景与引進華僑華人資本」p87
- 22) 前掲1) 廖礎強「華僑的貢獻与福清的発展」pp130-132
- 23) 前掲21) 童家洲論文 p90
- 24) 前掲22) 廖礎強論文 p137
- 25) 趙健「日本神戸華僑総会会長林春同」pp25-26 『龍的伝人在海外』中国華僑出版社 1999
- 26) 前掲1) 郭梁「華人資本与福建的改革開放」pp1-11

参考文献

- | | | |
|-----------|-------------|-----------|
| ・福建省志 | 福建省地方志編纂委員会 | 1992 |
| ・福清県志 | 方志出版社 | 1997 |
| ・福州市志 | 方志出版社 | 1998 |
| ・華僑華人百科全書 | 中国華僑出版社 | 1998 |
| ・源 | 新加坡宗郷会館聯合總會 | 1995-2000 |
| ・華僑華人資料 | 僑聯資料室 | 1995-2000 |
| ・華僑華人歴史研究 | 中国華僑華人歴史研究所 | 1994-2000 |
| ・在留外国人統計 | 財団法人入管協会 | 1972-1999 |
| ・海外華人経済研究 | 海天出版社 | 1999 |

試探福清僑郷社会与福清華僑華人的網絡

世界上福建省籍的華僑華人達約800多万人。福建籍的華僑華人可以分為四個方言群。在東南亞，福建籍的華僑華人大多數是閩南人，一般上把閩南人總稱為福建人。福清出身的華僑華人屬於閩北幫，是華僑華人社会的少数幫派。其數量是約51万人，遍布70多個国家和地区。過去，福清因為地理自然条件的關係成為落後貧窮的地区。因此，有不少的福清人為了要擺脫貧困生活，尋求新的出路，往印度尼西亞，馬來亞，新加坡，日本等出国謀生了。現在，福清是福建省的重点僑郷之一。改革開放20年來，由於在外福清華僑華人的直接間接的投資和贊助，使僑郷福清社会的面貌發生了巨大的变化，經濟事業和文化教育都正在蓬勃發展。

本文，筆者試探東南亞和日本的福清華僑華人社会的歷史發展和福清華僑華人的網絡。对在廈門大学南洋研究所和新加坡收集的資料進行研究分析的過程中，筆者能了解到福清的新移民的潮流傾向和新的出国要因。福清華僑華人網絡有与僑郷福清社会的密接關係，也有与世界福清華僑華人社会的相互關係。

（OGI, Hirofumi 本学部教授）